

特69-562



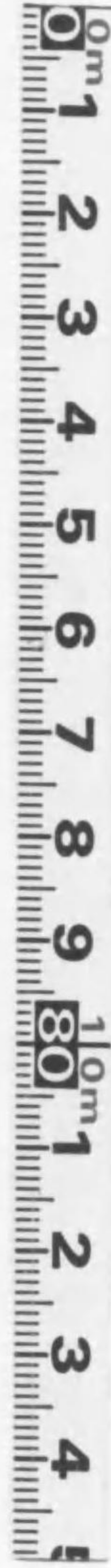
\*1200800273785\*

特69

562

桜狩武蔵野の解

国立国会図書館



始



特69

562

武櫻  
藏  
野狩  
の  
解

~~25  
46~~

明治三十九年二月三日帝國琵琶研究會に於て

櫻狩の解釋

今晚は、櫻狩と云ふ、歌の解釋を致します、其前に、一寸、此歌に就て、琵琶を入れる所を注意して置きます。

霞棚引山々の、さかりの花を詠めひと、此でチャン、トント、短じかく入れ、芝の庵を只獨り、此所にて、中段の一を至極短く彈ずる方宜しくあります、長く彈てはいけませんね、ねぐら放れし鶯ので、上段を入れざる方が宜ひ、只トントんと、打つて置く方が宜ふ御座ります。すゝむる駒のたてがみにて、下段の三を極く短かく、實は氣合の抜けない内に、下の句の、みだれかゝれるを謠ひ出すべきであるから、琵琶はトントン位でも宜し、梢は雪か白雲か、是は中段でも、下段でも宜ひ、中段の二なら、皆んな彈ひても宜ひ、矢たこの筆をとりあへずで、例の如く糸を叩き、詩を吟ず、此詩のあとで、琵琶を入れてはいけませんね、琵琶を入るる所は、詩でも、和歌でも、あとに、ト、云ふ字

吉水錦翁述  
橋本錦龜速記

明治  
39 6 26  
内交

の無き所に入れて、ト、云ふ字の、ある所は、只トんと、一の糸を叩く位がよろしい、夫れから、飛びかふ蝶の如くなりて、中段の二を一ぱいに、皆様御好の音色を充分に御弾きなさいまし、それから、此吟替りの、嗚呼世の中は鳥羽玉ので、可成極く短かく、見る影もなくなり果てい、同じく短く、下段を入れ、昔をしのぶ人もあらむで、中段をまつかり御弾きなさいまし、まづしき人も何時までか、時めく時のなからめや、此所は、中段の三を、普通に弾き、たどらむ外はなかりけりて、下段の一を充分に弾く、いざ歸らむと乗る駒の、手綱かひくる其袖に、是も可成トントんと入れる方が宜ひ、此櫻狩は、琵琶を長く入れる所は、飛びかふ蝶の如くなり、昔をしのぶ人もあらむ、時めく時のなからめや、たどらむ外はなかりけり、などでありませす、其外は皆んな、短かく入れ、或はトントント叩く斗で御座ります。

夫れから、此櫻狩に就きまして、其原因を一つ申上ます、是は一體、此薄命能伸の詩がありましたから、此詩に據つて、私の考案が出来た歌で御座ります、此詩は、肥前の人で、矢澤棟之進と云ふ人が作つた詩で、舊水本議官(名ハ成美)の塾頭をして居た人でありませす、疾くに故人になりました、そこで、此詩の意味より申上た方が順序かと思ひませす、此詩の題は、櫻花を詠すと云ふ題であります、さて水本先生は、舊幕生れの人で、鹿兒島の御抱となり、右の矢澤氏を連れ歸郷して、鹿兒島學館の、教

授をして居られました、御維新後、上京して、終に議官となられた人であります、私は學館時代より、先生の教授を受け、引継ぎ東京にても、教を受けて居りましたから、矢澤氏には、兄として仕へ、吟聲も此人に教を受けたのであります、此詩を記憶して居る者は、私し位の者であらふと思ひませす、これを只私が胸中に、藏めて置ては、益にもなりませぬから、歌にても作り置かば、後世に残るだらふと考へ、此櫻狩を作たのであります、是れから詩の意味を申上ます、櫻と云ふものは、諸君御承知の如く、花は二日か三日しか盛りはなひ、夫れを櫻町の中納言と云ふお公卿様が、御歎息なされまして、せめては十日も、壽命を延ばしたひと思ひなされて、和歌をお詠みになりました、其和歌は忘れましたが、なんでも花の壽命を、十日も延したひと云ふ意味の歌であります、此歌をお詠みになつた所が、不可思議にも、櫻が十日も咲いて居つたと云ふ事があります、それだから、薄命能伸旬日、壽と申たので、十日の命をば、櫻町の中納言が延して仕舞ふた、薄命と云ふ字義は、不仕合せとも譯しますが、此所では命が極短かく、花が散つて仕舞ふと云ふ意味であります、句と云ふ字義は十日といふ事でありませす、扱十日の壽命を延したは、誰かといふと、櫻町中納言であるから、納言姓字胃斯花と申たのであります、姓字とは、俗に云ふ名字といふ儀にて、即ち吉水と云ふやうなものであります、其櫻といふ字を、頭に胃ツして居らるゝから、姓字胃斯花と云ふた譯であります、

零丁借宿平忠度は、櫻と云ふ事に就ての歌であります、零丁と云ふのは、零落ツラサれたと云ふ譯ワが附ひて居ます、平忠度が、「ゆきくれて木の下かけを宿ヤとせば花や今宵のあるじならまし」といふ歌を取たので、櫻の下に一夜を明せば、宿主は花であると云ふ意味であります、吟詠恨風源義家、これは、八幡太郎源義家が、勿來ナクの關にて、櫻花の散るを見て、「吹風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな」と詠ぜし歌を取つたので、せに散るとは、道も狭くなるまで道一杯に花が散るといふ事でありますが、風さへ吹かなければ、花も斯ほどまでは、散もすまひにといふて、風を頻りにうらみました歌であります、志賀浦荒磯暖雪は、是亦忠度の歌で、「さ、なみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」と云ふ歌で、「さ、浪とは、目にも見えぬ、細い浪がちらり／＼寄する事ぞ、其細浪のよする志賀の都も、今はあればはて、昔の面影もなければ、櫻だけは、もとのまゝであるといふ歌であります、奈良都古簇香霞、之れは伊勢の大輔が、(慥か百人一首にあつたかと思ふ)「古への奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな」と詠みし歌であります、是れは大輔が、奈良より櫻の枝を宮中へ献上する時に、添て差上たる歌と承りました、香霞簇るだとか、暖雪飄りだとか、いふのは、皆櫻花を形容したものであります、此詩は前に云ふ通り、櫻花を詠じた詩でありますから、南朝天子今何在欲望芳山路更餘と、顛結を南朝の天子と持て來たので、吉野山は櫻の名所、其名所に、

後醍醐天皇が寵らせられて、兵を御擧になつた事は、皆様御承知の通りであります、其頃は、南朝と北朝といふて、天子様が、兩方に御分れになつて居りましたが、南朝の天子様は、後醍醐天皇で、其天子様は、いづくに今在らせらるるか、芳山即ちよしの山を望めば、路が遙かにして、中々見られぬと、顛じて來て結ムスなのであります、起、承、顛、結、前聯、後聯、皆櫻の事を申て、變化自在、人をして倦ましめざるは妙であります。

扱引以下の事柄は、諸君も御承知でありますから、之を謠ふ時の心得を申上ます、自分が作つた歌を、綺麗な歌と云つては誠に可笑ウケひけれども、花見の歌ですから、綺麗であります、文章は極めて、きたない、夫で之を謠ふに就ては、餘り厳しく、即ち城山を謠ふとか、吹雪の敵を謠ふとか、(泣て謠ふ所もあるけれども)するやうな、意氣組で、謠はなひで、可成は春霞が扱引ひて、櫻が咲ひて居るやうに、長閑ノボに謠つて貰ひたい、夫れがマゝ櫻符を謠ふ心得だらうと思ひます、淺茅生は、茅カヤがまばらに生へる事、其茅などが所々に生へる所の、草の家といふ事にて、芝の庵と申ても同じ事で、皆卑下して申た事であります、此歌は、程能く文章の段落が切れて居りませぬから、琵琶を指定の外に入ると、所謂辨慶がな、ぎなたになつて、文章がわからなくなりすから、前に申た外に、琵琶を入れるのは御よしなさひ、只トーン／＼／＼位でよろしひ、もゆると云ふことは、草の生する事であります、

遠近とはあちら、こちら、と云ふこと、梢は雪か白雲かは、櫻の一ぱい咲いた形容の詞です、善悪とは字の如くで、よしあしと云ふこと、浮世と云ふ事に就く、二ツあります、憂ふる世と書ひて、憂世と云ひます、此時は、うを強く、きを軽く、呼ぶのであります、又浮世と書て、うき世と軽くいふ、是れは此世の中は、浮雲の如く、ふはくして、浮て居る世の中と云ふことであります、憂世と書くと、いやな世の中とても云ふ意味になります、世を憂ふると、いふのとは、又違ひます、うき世の善悪の時は、浮世の方宜く、吟替の、うき世の中とかこちつ、の、うき世は、憂の字の方宜ひから、其考にて謠はなければなりません、水莖は、手跡といふことにて、古へ使をやるに、梓に玉をつけて持たす、因て文を、玉梓といひ、又其梓を、ミヅミヅシキ木といへるに起るといひ、又一とくだりも、書き流し給ふ、水莖の流れをば見るなど、玄海にあります、風のまにまに、とめ来れば、とめは、彼處に櫻があるナーと見留る事、嗚呼と云ふは、歎息の言葉、うば玉は、夢だとか、夜だとかの枕言葉、鳥は眞黒なものだから、鳥羽玉の夜るとつ、けますが、夢とつ、くるは、夢は多く、夜る見るもの故、轉じて夢にもつ、けます、和歌枕詞補注などに書てあります、又玉鋒だとか、玉垣だとか、申て、玉と云ふ字をつけますは、大變褒める言葉ださうであります、茲に玉鋒と云ふたのは、道といふ事を、いはんが爲に、此枕詞を置たのでありますか、昔し未だ道路の無き比は、鋒を處々

に建て、道のしるべと、なしたるもの故、玉鋒の道とつ、ける譯であります、或先生に、此歌を直して貰つた所が、其先生の云ふには、昔を忍ぶ人もあらんは、彼の卒塔婆小町の事跡に、宜く似て居ると、いはれた事があります、成程小町は、全盛の時代は、飛鳥も落る程の勢でありましたが、衰へると昔をかこつことになり、河陽江の唱婦が歎にも、又似て居りますやうで、兎角人間は、榮枯盛衰のあるもので、俗に七ころび、入起など、申て、人間の境遇を、能くうがつたものであります、實に其通りで、今金持て盛にやつて居ても、時によると貧乏になることがあります、貧乏なつたとして、必ず心にくやむことはありませんが、只一心に心掛けることは人間の道といふ、道であります、此道さへ踏はずなれば、富士の山程、金を持って居るよりか、貴くあります、夫れから、皆さんが思ひ違へる所は、時めく時のなかりめやで、此節は、中段の三を弾く節に、謠はなければならぬと、思ひ詰て、前の句、即ち貧敷人もいつまでかを、地の地に謠はずに、普通の地に謠ひ來て、急に中段の三を弾く節に謠ふから、聲の調和を缺ぎ、甚聞苦敷なり、中段の三を弾くふしは、前の句を、地の地に謠ふて、かゝらねば、聲の調和が保てませぬ、尤貧敷の句を、地に謠つて、時めく時を、中干のやうに謠ひ、中段の二を、弾ても宜敷けれども、少し氣合が、強すぎるから、やはり中段の三の節に、謠ふたほうが、穩當でありましょふ、詰り此櫻狩は、嗚呼世の中から、たど

らむ外はなかりけりまでが、骨子であります、花の吹雪とは、櫻の花が散る形容を云たもので、雪のやうに、花が散ることを申たものであります、先づ櫻狩の解釋は、之で終ひに致します。

明治三十九年二月二十三日帝國琵琶研究會に於て

吉 水 錦 翁 口 述  
田 中 錦 田 速 記

### 武藏野の解釋

今晚は、武藏野といふ、歌の解釋を致します前、例により、琵琶を入れる處を、先づ申上ます。摘み菜にすればさても少して、下段の二を充分弾いて宜敷あります、只いたづらに日を送りて、中段の一を短く、才智藝能なき人にて、上段を極く短くか、或はトン、カアチャツ位で、上の句の、聲の切れないうちに、下の句の、實の山が出る様に、弾く方が宜し御座ります、空敷歸るが如く也で、下段の三を、人と生れし甲斐もなして、中段の三を、いつの時にか磨くらんで、中段の二を、いづれも充分に弾き、朽果るこそ無念なれで、決して琵琶を入れては、いけません、假令高位長者

の身となりての大干は、上段を短く、一夜の夢の如く也で、下段の三を長く、(彈法通りか、又彈法外の下段を弾いても、長きは彈法の三位)これを樂しむ人もなして、中段の三を、彈法通りに、扱も果敢なき命哉で、中段の二を、慳貪愚痴は迷ひなりで、二段法の中段の三を、解ればもとの野原也で、下段の一を、人の身の上で、終曲を、いづれも充分に弾て、宜敷あります、此歌は、歌柄も宜敷ありますから、琵琶が上手に弾け、ふしが上手に出来れば、此位、はどのとれる歌はありませぬ。

これから歌に就て、御咄し申上ます。

此歌は、島津日新公が、當時の士風の、すたれたるを、御歎きありて、御作りになり、琵琶に和して謠はしり、知らず知らずの中に、士風を引起されたと、いひ傳へてありますが、或はそふかも知れませぬ、色々調べて、見ますけれども、確乎としたものがありませぬ、尤末文に、少しきを、足りとも知れ、満ぬれば、月も云々は、日新公御作の、いろは歌、四十七首の一で、(す)の所に在る和歌で、下の句は、月も程なく十六夜の空と、あるから、後世武藏野は、日新公の御作だと、申したかも、知れませぬけれども、兎も角、教訓の歌で、ありますから、公の御作と、信じて、宜敷御座りませぬ。

扱武藏野とは、東京の昔の稱號で、今でも東京は、武藏の國と申しますが、徳川家康公が、覇府を開か

る、以前は、草茫茫とはへて、月が草より出て、草に入るといふ程の、廣き野原で、ありましたと  
うで、古き圖面などを、見ますと、汐入りの溝渠や、河川が澤山にありまして、無数の小島が、並  
べてあるやうに見えます、それを段々と埋立て、今の東京とは、なしたものであります、其武蔵野  
に、草は色々様々、澤山ありますが、さて我物に摘み、とらんと思ふと、誠にすくないと、いふ譯  
で、こゝまでが、一の段落で、此武蔵野の、大眼目であります、孔子の遺書の、大學で申しますと、大學  
の道は、明德を明かにするにあり、民を親にするにあり、至善に止るに在りと、いふ三綱領の如き、  
もので、大學一冊に、申てある數萬言は、此三綱領を、委細に説き明した、ので、假令へば、一の大綱  
を、引揚れば、それに附着して居る、小綱は、すべて揚り来る道理で、武蔵野も其通り、さても少し  
までは、大綱領であります、下の句は、皆これより、割出されて居るのであります、草でさへ其通り、  
人はなほの事、日本にも、澤山人は居りますが、申分のなき人は、誠に少ない、或は皆無かもしれ  
ね、字を澤山知て居り、和漢洋の書籍を、澤山讀んで居り、口に數萬言の、高尚なる理屈を、並べ居  
る人も、或は勇に乏敷、或は智に乏敷、仁義は勿論の事であるが、善き人と云ふ者は、中々得らるゝ、  
ものでは、ありません、それだから、各々勉強して、眞人間に、ならねば、ならぬと、皆人以下は、説  
かれたる、ものと思ひます、實は、さても少しを、俗に云ふ、切に致して、中段の一を弾き、皆人はよ

り、大千に致し度、所でありますけれども、今迄が、日を送りてで、切る事が、習慣になつて、居  
りますから、暫く習慣のまゝに、致し置ます、尤日を送りて、短く中段を弾けば、障りには、なり  
ませぬ、と思ひます。

摘み菜に、せんとすれば、誠にすくないが、人も其通りで、若き時から、いたづらに、日を送りて、  
才智をも磨かず、勉強もせず、ぶらぶらと、遊んで斗り居て、心は曇るが、ままた、曇らせて居るから、  
終には、放蕩無頼の、徒になり果る、のでありますから、寶の山に入ながら、其寶も得ることが出來ず  
に、空しく、歸て来るやうな、ものだ、と、誠にめられた、ものであります、皆人より、如くなり迄  
が、文章の一段落、偶は、ふと、といふこと、ふと(人)といふ、尊き動物に、生れて來ながら、虚靈不  
昧の心を、曇らせて、磨くことが、出來ざる人は、人と生れて來た、かひがないと、いふ譯で、是れ  
亦一の、小段落、ここで、眞如の玉と、いひしは、心といふことで、眞如は、佛語で、あります、そふで  
すが、譯しますと、眞實、如常と、云ふことで、眞實にして、虚偽の無き事が、平生の如くで、常に變  
りのなき事を、申た事だ、そふであります、それで佛語では、眞如の玉ともいひ、眞如の月とも申  
ます、そふ云ふ、尊きものを、人は持て居ながら、私欲の爲に、段々と、其玉を曇らせて、參るのは、  
誠に歎かば敷、事であります、それを磨くには、何を以て、するかと、いへば、乍恐明治の、皇后



陛下は、金剛石も磨かずば、玉の光りは、添はざらむ、人も學びて、後にこそ、誠の徳は、あらはるれ、と御さとし、下されました通り、學問の力にて、磨かねば、磨くことが、出来ませぬ、年を取た、われ、われ、如きものは、學問をする暇も、氣力も御座りませぬから、琵琶を弾じて、色々の歌を謡ひ、自ら樂しみつつ、心を磨くので、あります、其れが一等、早道であらふと、思ひます、若き人々も、同じ事、之れに依て、段々と心を磨き、學校に出ては、教師に就き、百般の文藝を、學びなさらば、是れに越したる、樂しみは、なからふと、思ひます、人よりは、淺くおもはれての、淺くは、才智藝能なき人とか、才智藝能は、ありても、不品行の人だとか、いふ人は、人より輕蔑されて、深厚に敬せられませぬ、始終人より、輕蔑されて、犬の老朽ち、たるが如くにて、名も成さず、死に果るは、誠に残念では、ないかと誠しめ、られたる、ものにて、其死に果る時に至りて、心付ても、最早遅いから、又いつの世の、いつの時に、磨くらんと、申されたので、所謂朱文公が、嗚呼老矣、是誰之愆ぞやと、誠しめ、られたのと、同じ筆法で、あります、併しながら、孔子も、朝に道を聞て、夕に死すとも可なりと、申て居られますから、老朽ちたりとて、自暴自棄は、小生などは、大さうひにて、未だ幾分の、氣力のあるうちは、琵琶なりとも弾じ、樂しみつつ、心を磨く考で、ありますが、此いつの時に、磨くらんの本文は、朱文公と同じく、誠められたる、文でありますから、是非と

も、死果る迄は、心を磨くことを、學ばねばなりません、頼まれぬより、夢の如くなり迄が、一段落で、先づ月鼠の、ことより、説き明かさ、なければ、わかりませぬ、月鼠と云ふ事は、梵語である、そふであります、白鼠黒鼠とて、白鼠を日にたとへ、黒鼠を月にたとへて、月日の事を、申たものだ、そふですが、其鼠の事を、説き明かすには、譬論經といふ、經文の中に、あることを、申さねば、わかりませぬ、或る時、旅人が、野原を通行する時に、後より狼が、追驅て参りますから、一生懸命に逃て、何か隠れ場所をと、さがすうち、古井戸を、見付しましたから、是れ幸と、其井戸の中央に、生ひ繁る、草の根を、つかまへて、井戸に身を隠しますと、井戸の上には、狼が待て居て、上て来たならば、一噛に噛まんと、にらみ付て居りますし、井戸の底には、鱈魚といふ、大口の魚が、落ちたならば喰らはんと、是又大口を開て居ます、旅人は、進退谷まりまして、ちいさく、なつて居りますと、右の白鼠と、黒鼠と、出て参りまして、草の根を、ブツブツと、噛み切て、仕舞ました、から、旅人は井戸の底に落ちまして、鱈魚の餌食に、なりましたが、頼まれぬ、ものは、人の、いのちで、ある、今迄達者にて、旅をして居た人が、忽ちの中に、災難に逢て、死て仕舞た、此月鼠は、實に移り變りの、早きもので、今に夜が明けるかと思へば、すぐ夜が入るといふ、鹽梅で、誠に月日のたつのは、早くて、刻一刻、年を取て、行きますが、人生朝露の如して、命もあてには、なりませぬが、世の

中と、いふものは、實に頼まれぬもので、はかなきものだといふ所から、頼まれぬ、世にもある哉、月鼠と、いふたもので、あります、誠に意味深長で、一讀した位では、わかりませぬ、委き事は、和訓の榮にも見えて居ります、前にも申す通り、人生は朝露の、やうなもので、ありますから、戦く草葉の、露の身と、申たもので、戦くとは、春風などが、吹くとも、なしに、吹く時など、草の葉が、左右に、そよそよと、なびく事で、其そよそよと、なびく草葉に、置く露は、實に危ひもので、少し強き風が吹て、草葉が急に動き出すと、露は直に散りますが、人の命も、其やうなもので、あるから、たとへ高位高官に昇り、金銀珠玉を、澤山持て居る、長者の身となりて、榮華に誇り誇つて、楽しみ暮らしても、一朝死で仕舞へば、何もならぬのみならず、屍の未だ、冷へざるに、名の方が、先きに消えて、仕舞ますが、心を磨き、眞人間に、なつて居れば、屍は腐敗して、影も形も、なくなつても、名は萬世に、残りますによつて、若き時から、充分書物を讀て、心を磨かねば、ならぬといふことが、暗々裏に、含まれて、居るかと思ひます、七珍萬寶を、シチチン、パンホウと、讀ますに、シチチン、マンボウと、讀まねばならぬと、御寺の坊さんは、教へ呉れました、歡樂極まりてより、樂しむ人もなしまでが、又一つの段落で、歡も極度に、達しますると、かなしみが、生ずるもので、是れは、自然の理で、ありましようから、古人も、歡樂極まりて、哀情多と、申たものと思ひます、此古

人は、白居易では、ないかと、思ひますが、判然覺え、ませぬ、古書を調らべ、ました、ならば、わかるで、御座り、ましよう、さればにやの、にやは、助語の詞、生々世々を、セイセイヨヨと、讀では、いけないと、御寺の坊さんは、教へました、セウセウセセで、あるそふで、御座ります、外部の、月だの、花だのは、目を樂しませしめ、心を悦ばしむる事は、此上もなきもので、ありましようが、其心の中の、月や花は、眞如の玉を、磨き抜た、人てなければ、樂しむ事は、出來ませぬ、生々世々とは、世に生きて、居る、うち、とでも、申て宜敷御座り、ましよう、心の中の、月や花は、前に申た通り、眞如の玉を、磨き抜た人の、心の中と、いふものは、露一點の曇りなく、始終心の中が、月や花かの、やうに、奇麗で、ありますから、斯く申た、ものと思ひます、御互に、勉強して心を磨き、此月花を、樂しむ、やうに、なり度、もので御座ります、會者定離、生者必滅、は、一家一堂に、相會ふ者も、必ず離散し、生れ出ば、必ず死すは、どふしても、のがれぬ事で、親子、兄弟、夫婦の、至極親敷ものも、必ず一度は、離散、死別を、せねばなりませぬ、是れ即ち、世の常で、今春が來て、花が咲き、鳥が鳴くかと、思へば、すぐ夏が來て、木かげを、暮ふ、やうになり、それも瞬くうちに、直に秋の蟬を聞き、冬の雪を見ると、いふやうに、中々月日の立のは、早きものにて、すぐ離散するやら、死ぬやらにて人間と、いふものは、果敢なきものであると、説かれた、もので、ここ迄が、又一の段落で、あり

ます、前の月鼠の句に照應して、文章も亦妙であります、世の中を、思へばより、迷ひなりまでが、又一段落で、稻妻のやうに、ちらとする、寸時の間も、物をむさぼり、或は愚痴を、こぼしたり、するのは、迷ひであると、いふ譯で、慳貪は、金銀は勿論、飲食物の如き、ものに、いたるまで、自分の物に、爲し度と、思ひて、むさぼる事であります、此迷ひの、あるうちは、中々真如の月は、見られもせず、又樂しされも致しませぬ、引よせての句は、即ち、引よせて、結ば草の庵にて、解ればもとの、野原なりけりと、云ふ、佛法の、極意の、歌だそうで、あります、是れは、つまり、空といふことを、申たもので、是れを、家屋の事にて、申すならば、柱や、板や、釘や、竹や、土や、瓦や、茅などを、所々方々より、引よせ参りまして、結び合すれば、一つの草庵が、立派に出來ます、其草庵を、解き放しますれば、もとの野原になりまして、何一つも御座りませぬ、即ち人も此通りで、日野中納言資朝卿の、辭世の頌にも、五蘊假成形、四大今歸空、云々とあります、五蘊とは、色、受、想、行、識にて、色は身體の事、受想行識は、心を云ひしことにて、つまり、體と、心とで、あるそふです、尤受は、心に物を受くる事、想は、心より萬物を想ふ事、行は、おこなふといふ、意ではなくて、繼續といふ意、即ち、心に物を繼續してゆく事、識は、心に物を識別する事、四大は、地、水、火、風、のことと、あるそふですが、此五蘊にて、人は形をなし、まして、居て、活動致しますが、死にますると、骨は土

になるとか、血は水になるとか、いふ鹽梅に、夫々もとに歸ります、さよふになると、跡に残るものは、何も御座りませぬ、所謂空に歸すもので、彼の色々の物を持って来て、家を建ると同じにて、其家を解て、仕舞ますれば、残るものは、一つも御座りませぬ、只舊の野原斗りにて、即ち空に歸す譯で、あります、其空といふ事を、ささるまでが、中々六か敷そふで、御座ります、八田知紀ちき先生が、達磨大師の贊に、大空の、空しきものを、手にとりて、世に抛ちし、音のさやけさと、あります、達磨大師は、空といふ事を悟りて、此世の中に、教を垂れた人にて、其功は、莫大なもので、あると、ほめられた、歌だそふであります、長岡萬里君が、(達磨血)夢と題する、琵琶歌を作りて、私に添削を乞はれました時に、此歌を引事にして、書入れた事もありましたが、兎も角、達磨大師程に、なるといふ事が、容易の業では、御座りませぬ、扱少しきを、足れり云々の和歌は、前にも申上りました通り、日新公の詠歌で、御座ります、なんでも半分か、七八分で、止めて置ますれば、間違は御座りませぬが、凡夫のくせとして、充分の上に、尙充分にと、するから、間違が起るので、月も十五夜の、満月になれば、翌夜は、最早欠け初めて、参ります、道理で、人の身の上も、此通りだと、いましめられた、教訓の和歌を以て、此武藏野を、結ばれたので、一段落毎に、人の教となること斗りにて、誠によき歌であります、此和歌こそ、即ち前の、歡樂極まりて云々の句に、照應して、味へば

味ふ程、結構で御座ります、先づ今晚は、これまでと致します。

明治三十九年六月廿一日印刷  
明治三十九年六月廿五日發行

定價金貳拾錢

解釋者

吉水經和  
東京市芝區愛宕下町四丁目一番地

發行者兼

吉水經和  
東京市芝區愛宕下町四丁目一番地

發行所

錦水會  
東京市芝區四ノ久保巴町六十一番地

印刷所

帝國印刷株式會社  
東京市京橋區築地三丁目十五番地





終